

棕の道草第44号 「名を知る」

浜本三晴

病院の帰路、途中下車して父の墓参。その後、思い立って新宿御苑へ足を伸ばした。父の墓のある寺から徒歩十五分ほどである。墓参りのたびに気になっていたのだが、土日は人が多いだろうと敬遠していた。平日なら大丈夫だろう、のんびり歩いてみる気になった。

大木戸門から入る。御苑を歩く誰もが思うことだろうけれど、さまざまな巨木の立ち姿に圧倒された。あるがままに伸びて堂々と立つ木もあれば、振れるように樹齢を重ねて独特の姿を晒す木もある。伐られて整えられた古樹の美しさも捨て難い。這うように枝を広げるソメイヨシノの古樹もあれば、太い胴のような幹に極細い枝のみ残したソメイヨシノもある。

植物は好きだが、名前はよく分からない。プラタナスと篠懸が同じものとは聞いていたが、整形式庭園のプラタナス並木と、新宿門の近くの一本立ちのモミジバスズカケノキが同じ種だとは、とても思えなかった。樹形も木肌も全く違う。

棕俳句会に入れていただいたのは四年ほど前だが、句会に行けない年月が続いた。今年五月に、初めて谷保城山吟行句会に参加。以来、先生はじめ皆さんに木の名、花の名を教えていただきながらの吟行がとても楽しい。

名を知ることがはじめての一步。庭石菖、小さな花に似合わぬ漢字の名が新鮮。無患子は、城山で「これがそうか」と知った。真菰とも初顔合わせ。新しいことを学び、世界が広がってゆく喜びを感じている。

新宿御苑の植物には、名札のつくものがある。ついてないものも、もちろんある。名を知ることにははじめての一步だけれど、そこで留まってはいけないのかなと、ふと思った。同じ名であっても双葉の頃はそっくりであっても、年を重ねれば一木一木それぞれの樹形を持つことになる。ソメイヨシノ然りプラタナス然り。

棕の皆さんは定点観測の吟行を重ねて、名ではなく、そのもの自体と出会っているのだと気がついた。名を知って句を作るのではなく、その名を持つものを、ひとつひとつ、よく見て作りたい。ひとつひとつ、触って、嗅いで。それが知ることなのかもしれない。

掌をあてて言ふ木の名前冬はじめ 郷子

先生の句を心に、今度は御苑で一人吟行を試みたい。